

# 稲藁と暮らす

勸進代地区の稲藁文化



## この冊子は

令和二年度置賜文化フォーラム地域文化振興支援の助成を受け、文教の杜ながいが主催した事業である「稲藁文化を継承するプロジェクト」を構成する展覧会、講演会、ワークショップの記録です。本プロジェクトは山形県長井市勸進代地区の事例を紹介し、古えより農村の暮らしと共にある稲藁文化への理解を深め、世代や地域を超えて共同し、文化を保存・継承・活用する枠組みを広く普及させるため企画されたものです。

ムラの暮らしは  
二〇〇〇年の昔から変わりなく  
ワラの中で営まれてきたのではなからうか

(田畝弘「藁を語る」より)

### かんしんたい 勸進代の風景

長井市の西北に位置する、西山の麓の集落。地区内の「總宮神社」で執り行われる例大祭では、伝統の獅子舞が奉納される。

文教の杜ながいでは、古代からの特色ある地域文化や芸術文化を広く紹介し、地域文化の発展に寄与することを目的とし、県指定有形文化財・丸大扇屋の内蔵・新蔵を会場に年間四回の企画展を開催しております。この度、令和二年度置賜文化フォーラム地域文化振興支援の助成を受け、展覧会「稲藁と暮らす・勸進代地区の稲藁文化」を開催し、農村の暮らしを形成してきた稲藁文化について、長井市勸進代地区の実例と継承への取り組みを紹介いたします。

稲藁は生活の多くの場面で活用され、中でも草鞋は地域伝統の獅子舞には欠かせない履物として今でも重要な役割を果たしています。しかし昨今の稲作の機械化や担い手不足に伴い、材料の稲藁が育成されず、地域に根付いていた稲藁文化の消滅が懸念されています。そうした現状を受け、文教の杜ではここ数年にわたり勸進代地区の協力の下で草鞋づくりのワークショップを開催し、稲作から草鞋づくりまでを包括的に扱ってきました。本展では藁製品や勸進代地区の稲藁文化とその現状、継承への取り組みをまとめた映像作品などを紹介し、地域文化の現状と未来を考えます。

(展覧会挨拶文より転載)

# 藁を語る

田畝弘

## 五節草

五節草とは江戸時代の農書に出ている稲の異称である。(昭和二〇年代の「家の光」注1)で読んだ記憶。「北越雪譜」注2)にもある。注3)第五節間の話。稲草。注4)水稲の品種のこと。

稲作文化の発祥以来、村の暮しは二〇〇〇年の昔から変わりにくく藁の中で営まれて来たのではなからうか。

- ①藁布団(クズ布団)の上で生れて。
- ②記憶にない乳児期は毎日がエジコの中の生活であり、その後は藁のムシロの上を這いずり廻って遊び。
- ③外に出られるようになればアシダカをはいて遊び廻る。
- ④やがて働き手となればアシダカ、草鞋(冬季はジンベイ)をはき、脛にはハンバキを当

れをすばり藁の弁証法(※)と言ったのは山形県が生んだ農民詩人・真壁仁(注3)である。真壁仁が藁に対して、この言葉をつかったのはなぜだろうか？ 長期間、水田で育った稲が太陽と風で乾燥され、その藁が保温効果にすぐれ、湿気から人間を守る抵抗体に変化する過程は農民だからこそ着眼できたのだろうか。或いは豊かな詩的才能のなせる技なのだろうか？

※弁証法：弁証理論によって証明すること。弁証法は物の対立、矛盾を克服、統一することによって、いつそう高い境地に進むという発展的な考え方。起源はギリシアで対話の意。

## 村の変化

生産された藁の大半は家畜である牛、馬、山羊などの敷き藁になり、堆肥として土に還り(一部は薪がわりの燃料にもなった)、また新しい稲を稔らせてくれた。捨てるものなどない完璧なリサイクルである。

しかし、戦後の高度経済成長期(一九五〇年代後半)に入ると村の暮しはがらりと変わった。農作業の主役が畜力から機械になると多くの農民は、その高価な農業機械の代金を支払うため

て、雨が降ればミノを着て(日照りの時はヒレリゴモ)農作業、山仕事にはげみ。

⑤冬になれば、道踏み用のフカグツ(モサ)で道をつけ、夏の間を使う道具・材料の確保にはげんだ(縄緋い、ムシロ織り、吠作り、ミノ、俵編み、また各種のはきもの等無数にあり)。

藁は日本の農業を支えてきた大切な文化である。

## 藁の弁証法

田の水を多量に含んだまま、稔った稲は刈り取られると太陽と風により自然乾燥され脱穀される。残ったものが藁である。湿気の中で成長した稲が、ひとたび乾燥した藁になると、ムシロや布団やエジコに作られて、保温効果で農民の疲労を回復し、更には人間を湿気から守る抵抗体となった。すばらしい藁の効用である。こ

出稼ぎ者となった。米俵を編み、縄を綯う冬の藁仕事は出来なくなったのだ。出稼ぎの低賃金労働者が必要とした企業は逆に農民が使う袋も紐も履物もすべてナイロンやビニール製品に替えた。日常生活用品について農民は生産者から消費者へ立場を逆転させる事になった。

困り裏がなくなつて火箸も五徳も知らない若者が増えたように、藁製品も同じ運命を辿っている。最も身近だったアシダカ、ジンベイ、フカグツなど作り方はもちろん、名称さえ知らない人が多くなった。しかし藁の温かい肌ざわり、そしてあの軽快さ、何の心配もなく再び土に還ってくれる安堵感、そのなにも替えがたい効用は、もう見直されないのであるか。藁製品を駆逐した化学物質が、ダイオキシンなど人類の未来を奪う環境汚染の最大原因となっている。今だからこそ、藁への期待は単なる夢だけのものでは無いように思われるが、どうだろうか。

(二〇一一年に勸進代南郡公民館で開催された新春放談会にて配布されたテキストを転載)

田畝弘  
たせひろし



小学校二年生の頃、母に縄ないを教わる。その後近くに住んでいた年長者のもとで藁細工を学び、四、五年生ころから草鞋づくりを始める。それから現在まで約八〇年に渡り藁仕事に勤しむ。

一九三六年―西根村勸進代に生まれる  
一九四三年―西根村国民学校勸進代分校入学  
一九四九年―西根小学校を卒業。西根村立西根中学校入学  
一九五二年―家業の農業に従事しながら、県立長井高等学校定時制農業科で学ぶ  
一九五六年―長井北高校卒業後、長井市消防団、長井市連合青年団に属しながら農業に従事  
二〇〇六年―秋の叙勲消

防団永年勤続功労賞を受ける  
二〇二一年―八四歳で死去

注1 家の光  
JAGグループの出版・文化事業を営む一般社団法人家の光協会が発行する、八〇年以上の歴史を持つ家庭雑誌。

注2 北越雪譜  
一八三七年刊行の、江戸後期における雪国の生活を紹介した書籍。当時大ベストセラーとなった。鈴木牧之著

注3 真壁仁(まかべじん)一九〇七年―一九八四年/詩人  
山形県山形市生まれ。一九三二年詩集「街の百姓」を出版後、農業を営みながら詩作を行う。また文学、地域文化、農業、教育問題など広範囲にわたる評論活動を展開。「野の思想家」として活躍した。



## 田畝さんの作業場

長年に渡り藁細工の制作に勤しんできた作業場。制作中の縄や藁細工、昔編んだ蓑、履物の木型や道具類などが整理され並んでいる。



**ワラクス**〔写真1〕

— 藁をすぐったクズの部分。当時高価だった綿の代わりに使用し、藁布団にした。

**充分打った藁と、打つ前の藁**〔写真2〕

— 乾燥した藁を叩いて柔らかくする「藁打ち」の作業を行うことで、プラスチックのような硬さだった藁が柔らかくしなやかになる。念入りに行う（目安として、ひと束八百〜千回打つ）ことで縄ないがしやすくなり、丈夫な草鞋を編むことができる。藁打ちは寒い時期に行われる（他の時期では叩いてももの硬さに戻ってしまう）

**わらびつつ**〔写真3〕

— ヨコツツとも。藁を柔らかくするために使う藁打槌。ランマーやカケヤで柔らかくした後、わらびつつを用いて入念に仕上げる（西根コミュニティセンター蔵）。

**藁の背比べ**〔写真4〕

— 左から彦太郎糰、こだけ糰、コシヒカリ（変種）、つや姫。履物づくりに適している（藁細工用「彦太郎糰」より短いが、細く柔らかいので藁打ちもそこまで苦にならない）。コシヒカリの変種は長さが揃わず安定した栽培ができない。



写真右：内蔵入口正面に展示された田畝弘さんが制作した草鞋。熟練の技術で丹念に作られた草鞋は耐久性に優れ、艶があり、芸術作品のように美しい。



内蔵での展示風景



2



1



4



3



6



5

### 黒獅子まつり

—長井市に伝わる伝統行事。水神の化身とされる黒い獅子が人間の住むところを誂い清め、五穀豊穡、無病息災などを祈願しながら練り歩く。獅子の頭部から伸びた、波模様を描かれた長い幕の中に複数の人が入り込んで、龍のように身体をくねらせながら舞うのが特徴。その黒獅子を操るのが獅子連。祭りのときは白装束に身を包み、脚絆を巻き、草鞋を履いている。黒獅子を覆う幕の下からは足元が見え、黒獅子の神秘性を演出している。

### 草鞋（わらじ）【写真1】

—主に山仕事に使用される作業用の履物。獅子舞に使用するため用意されていたが、二〇二〇年は感染症対策から黒獅子まつりの開催が見送られたため使われなかった。田畝さんのつくる草鞋は特に丈夫で、左右を履き替えながら八里以上も歩くこと

ができる。

### 草鞋の工程

1. 短い縄
  2. 継いだ縄
  3. 充分な長さの縄（身長くらゐ）
  4. 作り始め。左の輪を少し長くする。
  5. 「乳（ち）」がついた状態【写真2】
  6. 「うさぎ耳」がついた状態【写真3】
- 制作する際に手やそんこ鉋を  
用いて強く引き締め、密度を上げながら作業することで、より丈夫な草鞋になる【写真5、6】

### 嬰兒籠（エジコ、エチコ）【写真4】

—幼い子を入れておく用具。こどもが這い出すまではこれに入れて育てた。類型のものに飯詰籠（イズメコ）があり、飯の保温に用いられた（丸大高屋蔵）。

**手縄**〔写真1〕  
 一藁でなった中縄。藁細工はこれが出来ないと始まらない。

**縄の結束法**（細縄も含む）〔写真2〕

―作業中の仮結束も含めて（苗結、蝶結びなど）製品に残る結び方（アシダカの鼻緒は角結び、フカグツの妻の上部は男結びなど）。

右から苗結び、男結び、角結び、両輪結び（蝶結び）、片輪結び

**アシダカ**〔写真4左〕

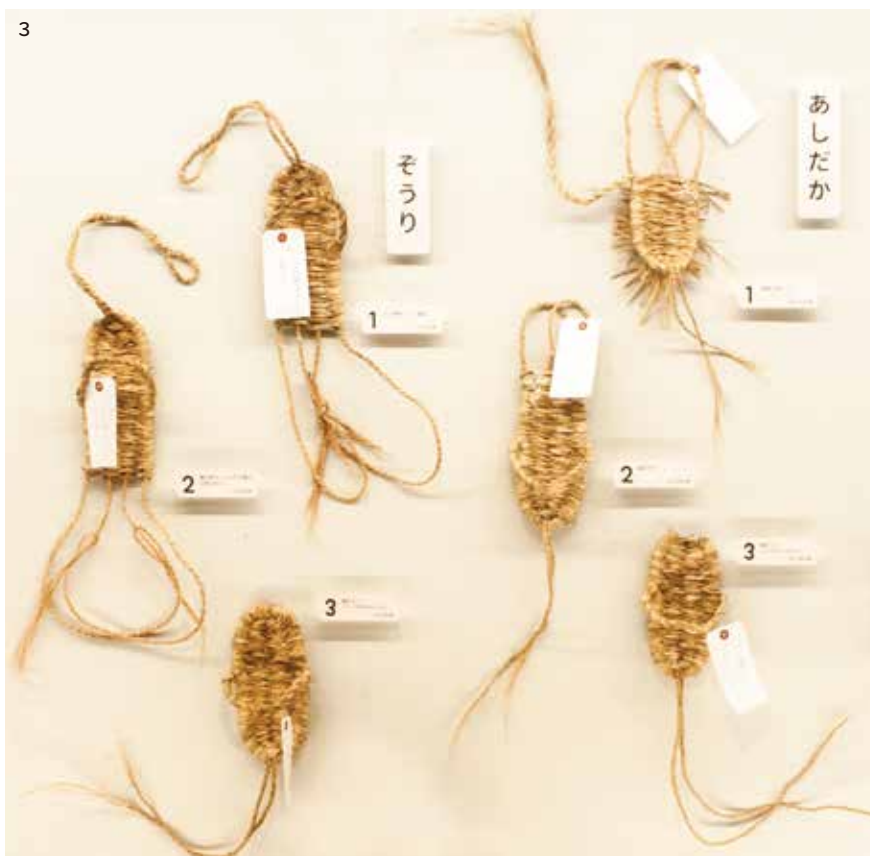
―足半・アシナカとも。普段履き。こどもが遊ぶ時や作業用の簡易的な履物で、踵の部分が丸くない。また踵の無いものもあり、川漁や山仕事で使われた。

**アシダカの工程**〔写真3〕

1. 横緒の取りつけ
2. 編み終り
3. 縄を引く（踵は丸くならない）

**草履**（ぞうり）〔写真4右〕

―アシダカと似ているが、つま先が出ず、踵が丸く処理されている。良い衣装を着たときなどに使用した。農民が自製するものと職人が制作するものがある。



**草履の工程**〔写真3左〕

1. 引き縄をつけて編む
2. 編み終わったら引き縄を交差させる
3. 縄を引く（踵は丸くなる）





フカグツの木型〔写真4〕  
— 峰がある木型。

- フカグツの工程〔写真上左〕
1. フカグツ用の縄（サイズ二〇センチ用、八〇センチ折返）
  2. 下地作り始め（妻の部分）
  3. 下地づくり終了（サイズ二〇センチ）
  4. 妻部分編み終了
  5. 立上がり部分途中〔写真3〕

「踏込（ふんごみ）」とも呼ばれる、雪の中を歩く時に使う履物。暖かく歩きやすい。

フカグツ〔写真3〕

— 峰がなく平らな木型。

ジンベイの木型〔写真2〕

- ジンベイの工程〔写真上右〕
1. ジンベイ用の縄（大人用）
  2. 下地づくり（妻の部分）
  3. 妻の部分終り（型入り）
  4. 踵部分の藁を取り付け下地編み終る

ジンベイ〔写真1〕  
— ジンベイとも。藁の浅ぐつの一様。



新蔵での展示風景

編み方のいろいろ [写真1]

— 藁細工で手編みするところはたくさんあるが（主に蓑、ハンパキ、カンゼン）、この3通りの編み方でほとんどのものは作れる。

- ・ 2本編み（編みの基本）
- ・ 3本編み（三つ繰り）

・ 鷹の羽（左右の指が同じ働き。傷みやすいところに）

蓑（みの） [写真2]

— 雨雪を凌ぐために着る外套。荷運びのクッションを兼ねる場合もある。形式は様々で、呼称も地域によってケラ、シヨイコ、バンドリなど多様である。竹を加工した道具を使用し編んでいく。

蓆（こも）

— 農作業用の簡易な敷物、牛馬の背覆い、養蚕、古くは扉の代用に吊るしておくなど多様に使われる。古くはマコモを材料としたが、もっぱら藁を用いるようになった。

コモツツ [写真3]

— 蓆編台。筵機（むしろばた）と異なり、一人で作業できる。いくつかの溝が切っており、そこに紐を掛け木や石をおもりにして編む。手前に引く時だけ絞るとききれいに編める。

**藁細工の道具** [写真上]



**ハサミ**  
—ふつ々のハサミ。

**反りバサミ**

—ワラグツのへりなどをまっすぐに整える道具（ふつ々のハサミではガタガタになってしまう）。

**手かぎ**

—ワラグツの編み紐などをまっすぐに整える道具。

**そここ鉈**

—草鞋を引き絞る際に使用する道具、出っ張りを引っ掛ける（そここ…へそ曲がり、ひなくれ、偏屈）。

**ワラツギ**

—藁をつくる時に編み目を持ち上げ藁をくぐらせるための道具。

**縄綯いの仕上げ**

—綯った縄をしこいて滑らかにするための道具。田畝さんの自作。

**藁細工いろいろ** [写真下]

**牛の草履、馬のクツ**

—主に冬季に牛馬を役務する時、雪から足を保護するため履かせたもの。山の作業では夏季でも履かせる人がいた。

**ハンバキ**

—脛巾、はばき。足の脛を保護するために巻きつけるもの。山仕事の際に草鞋とともに使用したり、湿気を通さず保温力もあるため雪中や雨中の歩行にも使用した。

**ナデボウキ**

—作業用のホウキ。一番簡単に作れる。

**展示品リスト** [品名／展示場所／頁]

**はきもの**

- 草鞋／内蔵／P 8、10、11
- 草鞋の工程1〜6／内蔵／P 10、11
- アシダカの工程1〜3／新蔵／P 13
- アシダカ完成品／新蔵／P 13
- 草履の工程1〜3／新蔵／P 13
- 草履完成品／新蔵／P 13
- ジンベイの完成品／新蔵／P 14
- ジンベイの工程1〜4／新蔵／P 14
- ジンベイの木型／新蔵／P 15
- ワラグツの工程1〜5／新蔵／P 15
- ワラグツの完成品／新蔵／P 15
- ワラグツの木型／新蔵／P 15

**藁細工いろいろ**

- エジコ／内蔵／P 11
- 手縄／新蔵／P 12
- 藁／新蔵／P 16、17

菰／新蔵／P 16、17

コモツツ／新蔵／P 16、17

菰編み用の藁／新蔵／P 16、17

牛の草履／新蔵・蔵座敷／P 18

馬のクツ／新蔵・蔵座敷／P 18

ハンバキ／新蔵・蔵座敷／P 18

ナデボウキ／新蔵・蔵座敷／P 18

**藁細工の道具**

わらびつつ／内蔵／P 9

ハサミ／内蔵／P 18

反りバサミ／内蔵／P 18

手かぎ／内蔵／P 18

そここ鉈／内蔵／P 11、18

ワラツギ／内蔵／P 17、18

縄綯いの仕上げ／内蔵／P 18

**その他、藁細工の資料**

- ワラクス／内蔵／P 9
- 打つ前の藁／内蔵／P 9

充分に打った藁／内蔵／P 9

藁の背比べセット…つや姫、コシヒカリ

(変種)、こだけ糯、彦太郎糯／内蔵／

P 9

縄の結束法／新蔵／P 12

編み方のいろいろ／新蔵／P 16、17

**映像作品**

草鞋をつくる／新蔵・蔵座敷

稲藁をつくる／新蔵

**その他**

記録冊子の紹介／新蔵・蔵座敷／P 28

# 勸進代地区の稲藁文化とその継承

田畝弘十村上滋郎

聞き手＝後藤拓朗（文教の杜ながい）

二本のドキュメント映像作品「草鞋をつくる」「稲藁をつくる」を鑑賞しながら、制作の背景や藁細工へ思い、また継承への取り組みについて、勸進代在住で藁細工制作者の田畝弘さんと、アメフラシ代表の村上滋郎さんに話を伺った。本稿では対談内容の一部を編集し掲載している。

## 映像制作の経緯

—今回作成した映像作品はどのような経緯で制作に至ったんでしょうか。

村上 アメフラシが草鞋や藁細工に興味を持ち調べ始めたのが二〇一五年頃のことです。隣の家のおじさんが畑をやっているんですが、キュウリやスイカなどの地面を這う系統の苗を育てるときに地面に敷く稲藁を、少しもらって縄縷いを試してみたいです。小学校の時に体験していましたが、祖父が縄を縛うところを見ていたので、僕は自然とできたんです。でも一緒にやったアメフラシのメンバーはみんな全くできなくて「そうか、ここからいろいろ調べたりチャレンジしたりしないといけないんだ」と思

い、二〇一六年に縄と竹でつくる一輪挿しのワークショップを開催しました。その後、やはり草鞋がやりたいということで、何名かの草鞋を作れる方に習いに行っていてもらいました。そういう活動をしていることを、アメフラシのメンバーで当時長井市の地域おこし協力隊員だった松崎綾子さんが報告会で発表をした時に、ちょうど市議会議員の方が聞きに来ていて「勸進代地区で藁細工を作れる田畝弘さんという方がいるからその記録を取ろうと思っているんだけど、協力してくれないか」と声をかけてください、それがきっかけでした。

—田畝さんはこのような若者と出会ってどのような印象を持たれましたか？

また僕の父とも関わりがあり、親子三世代で田畝さんとお付き合いさせていいたいたということを後で知りました。

田畝 偶然といえば偶然ですけども。私も何年か出稼ぎをやったのですが、その時に村上さんのおじいさんと一緒に行かせてもらいました。その後、致芳地区公民館で開催している「一日八里（ひしてはざり）」という、一日で三二キロを歩く行事に参加させてもらうようになって、その時に公民館の仕事をやっていたのが村上さんのお父さんでした。それでまた今回のことが持ち上がった、機会が続いたということです。

村上 田畝さんは自作の草鞋でどれくらい歩けるんだろうかということを実際に自分で体験するためにそのイベントに参加していたという話を聞いて、すごく説得力のある草鞋なんだと思いました。

田畝 私の場合は、「一日八里」に草鞋で参加したというのはいたすら心だったと思います。参加者は皆シューズを履いて参

加しているわけですけども、「一体俺の作った草鞋はどの程度持つものなのか」というようなことが頭に浮かび、草鞋でも別段構わないだろうという考えで参加させていただきました。それで一〇年ほど参加しましたが、シューズを一度も履かずに毎年草鞋でお世話になりました。

—実際に草鞋で三二キロ歩くことはできたのでしょうか

田畝 一日は問題なく歩きました。草鞋を少しでも長く履くために、大体一時間ほど歩いた時に右と左を交換します。そうすることで草鞋の消耗を防ぎ長持ちさせることができます。

## 二二だけで作れる記録映像

—映像を拝見し、単なる草鞋の作り方解説ではなく、勸進代の自然風土や農村で暮らす人々の営みが輝く美しい作品だと感じました。

## 一日八里を一足の草鞋で歩いた

村上 ちょうど田畝さんと僕の祖父が一緒に出稼ぎに行っていたという縁もあり、出会った時に色々な話をしてくれました。

田畝 今思うと、結局はそのように必要に迫られて覚えたと考えられます。それがずっと続いていたのですが、だんだんそういう需要がなくなってきました。途中ブランドはあったんですけども、藁仕事を続けるためには何がいいのかということ、なんとなく草鞋に絞ってやっていました。そのうち、地区の老人会である寿会の方々が担っていた獅子舞で履く草鞋づくりを、藁細工用の稲藁が無くなり誰も作らなくなってきたということで、勝手に私が引き受けるという結果になりました。その草鞋の奉納からずっと続いて現在に至ります。子供の時に覚えた色々なものの作り方は忘れていまして、手慰みにチヨイチヨイといたずらしていたんですけども、そんなものが今回たまたま皆様の目に留まったのだと思います。



美術科、東北芸術工科大学洋画コース講師。  
一九八三年山形県長井市に生まれる。二〇一三年より生まれ育った山形県長井市を拠点に活動。二〇一五年にアートコレクティブ「アメフラシ」を結成。二〇一七年に地域の食材を活かしたクラフトビール会社「長井ブルワリークラフトマン」を設立。廃工場を再生させる「Kogane」プロジェクトや伝統産業の継承プロジェクトなど、地方でのアートの役割・共存を模索している。

村上 映像を作るときに勸進代の皆さんと色々なことを話したのですが、実際にこの映像を見た人が草鞋を作りたいとか詳しく知りたいたいと思えることが目的だとしたら、やはり単なる記録ではなく、みんなで取り組んでいることがリアルに伝わるものにしようと思いました。地域の方が作っている縄文太鼓の音楽も一緒に入られて、こっけで作れる独自の記録映像として多くの方に見てもらえるものになればと思いつきました。題字も土らしさや自然らしさを出すために何パターンも作りました。最終的には左手で書いた文字をレンジリングし、ゴム板に彫って版画にして、それをスキャンして取り込んでいます。

### 未来へ継承するために

—改めて質問したいのですが、この動画は勸進代の稲藁文化を未来に継承するという目的で作られたのでしょうか。

村上 もともとは色々な藁細工の作り方を記録しておくのが目的だったんですけど、ひとまず草鞋の記録を作ってみるようになりました。

長井市には黒獅子まつりで草鞋を履く需要があるんですが、ちょうど今は狭間だと思っんですけど。草鞋を作れる人が残っていて、草鞋を使う文化があり、若い世代に作ってみたいと思ってる人がいて、じゃあ作ってみようというのがスタートだったんです。

—他の地区でも継承には課題を抱えているのでしょうか。

村上 課題……そうですね、ネガティブな言い方をするとそのように受け取るしか無いんですけど、品種改良で災害に強く台風でも倒れない、すごく背の低い稲がどんどんできていて、更に機械化が進んでコンバインで刈り取るので、藁細工として使える藁が本当に無いんです。なのであえて背の高い昔からの品種を作らないと、藁細工用の稲藁は確保できないという現状があります。黒獅子まつりも今後は地下足袋などに変わっていくのではないかと話を聞いた時に、なんとなく寂しい気持ちになり、なんとかできないかと思つた時にこういう話があり、チャレンジしてみたいと思つたんです。僕の場合はヒーターに戻ってきたので獅子連には

入れなかつたけど、何か違う形で獅子舞と関わりたいという思いがありました。獅子連ではないけど、草鞋づくりで関わりたいという人たちと一緒に、藁を作るころから始められるような広がりがあった方がいいと思います。形やメンバーはあえて決めずに、やってみたいという人たちが少しずつ集まって何かができるという、一つのモデルになればいいなと思って勸進代の方々と協力して取り組んでいます。

—田畝さんは、継承への危機感や使命感をお持ちなのでしょうか。

田畝 非常に大きなテーマだと思えますけども、やはり自分ができなくなっても続いていく手段を模索していきたいと思っています。とにかく黒獅子まつりがある限りは草鞋は必需品なわけですから、なんとかして続けていく方法をとっていただけたらと思っています。

村上 田畝さんが作った草鞋は本当に長持ちするんですよ。僕は二〇一九年に急遽黒獅子に入るこになり改めて草鞋を履いたのですが、あつという間にほつれるんですよ。そこで改め

て田畝さんが作ったものを見ると、硬いコンクリートの上を歩いても余裕で二日は保つし、去年使った土のついた草鞋を今年も使えるくらい丈夫なんです。そこまでのものを素人の僕らが今つくるのは無理なんですね。なのでいかに継続して作り方を覚えつつ、その後にくオリティを上げていくかということになると思います。いきなり皆で継承するというのは難しいと思うんですけど、だからといって何もしないのではなく、どのような形でカバーできるかを考えなくてはならないと思っています。

(公開採録 二〇一九年十一月三日 日 一四時～一五時三〇分 小桜館ホール)



勸進代地区の取り組みや草鞋の制作工程が、美しい里山の風景とともに記録された映像作品。

草鞋をつくる

二〇一八年／撮影・編集・動画制作・アメフラシ／協力・勸進代寿会／39分24秒



稲藁をつくる  
二〇一九年／撮影・編集・動画制作・アメフラシ／協力・勸進代寿会／32分20秒



# 本当の継承とは何か 草鞋に関わってきたアメフラシの記録

池田 將友



2020年1月の草鞋づくりワークショップの様子。文教の社では2017年より毎年開催し、年代を問わず多くの参加者が草鞋の作り方や稲藁文化の現状について学んできた。写真中央左の田畝弘さんは、材料の確保から指導まで全面的にサポートしていた。

作る人が減って、草鞋を履きたくても草鞋がない……そういう話を耳にし、ならば、私たち『アメフラシ』が作り方を覚えて広め、「草鞋を必要とする人たちが、自分の草鞋を編めるようになる」となれば、伝統が途絶えないのではないかと考えた。という考えの下、アーカイブを始めたのが関わる切っ掛けでした。とは言っても、私たちも素人で、縄をなうどころか、事前準備である藁打ちすら正しく行えませんでした。

作れる人を訪ね、一から習い、ようやく形になって、曲がりなりにワークショップなどを開催できるようになった頃、長井市勸進代在住の田畝弘さんと出会ったことが、大きな転換期となりました。

田畝さんは、草鞋づくりの名人で、毎年、黒獅子まつり用の草鞋を作り続けてきただけあり、その草鞋は、私たちが学んできたものよりも肉厚で、とても丈夫なものでした。しかし、高齢になり引退することになってしまっ

たので、同地区の方から、作り方を撮影して残して欲しいと相談を受け、私たちも技術を学びたいということで引き受けました。

撮影を進めていく中、どうすれば丈夫になるか、縄の太さが均一になるか、仕上げが綺麗になるかと、田畝さんの草鞋が理論的に作られていることに気づきました。私たちは、これを映像で残すだけでなく、イラストや文章に起こすことで、より明確にし、伝えやすいようにデザインしました。

草鞋文化の継承に一筋の光が見えた、と同時に、根本的な問題に気づきます。それは、材料となる藁がないということです。

草鞋づくりが衰退した背景を紐解いていくと、時代の変化により、草鞋に代わる履物の登場や農業の機械化と稲の品種改良、生活スタイルの変化など、環境と社会が大きく変わってしまったことが要因でありました。

草鞋用の稲作りは、昔ながらの人力に頼る部分が大きいです。田畝さんが引退をするこ

とになったのも、高齢になり、作業が大変になったからでした。ただ、これを農家一人が背負うのではなく、草鞋を必要とする人たちが協力することで解決できないかとも思いました。草鞋を必要とする人、すなわち獅子連(黒獅子まつりで獅子を操る若者)たちが協力して稲を作ることで、個人の負担を軽減しながら、伝統を守ることができないのではないかと、草鞋を必要とする人たちが、稲作りから草鞋を作れるようになることが理想なのではないかと考えました。

この考えに賛同してくれたのが、勸進代地区の寿会(老人会)の方々で勸進代獅子連です。それまで、稲も草鞋も農家が作るのが当たり前であったのですが、失われていく現状を獅子連たちは肌で感じており、また、黒獅子まつりの伝統的な付まいを守りたく、草鞋を履きたいという強い思いがあつて、「作り方を覚えてほしい」と声を上げてくれました。それに対して、「若い者が言うならば」と、寿会の方々が強要するのではなく、協力するという、私たちが理想とする共同関係が生まれました。

難しいと思われていた稲作りも、農家の協力が前提になりますが、田植え、稲刈り、脱



池田 將友  
いけだ まさとむ

一九八三年生まれ。東北芸術工科大学生産デザイン学科卒業。小説家。文筆家、飲食店経営。地域の歴史、文化、郷土出身作家を研究し、文化財保護に従事。表現の可能性を求め、二〇一二年より執筆活動を開始。二〇一四年から二〇二〇年まで一般財団法人文教の社ながいで勤務し、草鞋づくり体験ワークショップをはじめ歴史や芸術文化に関する多くの事業企画を手掛ける。現在は、家業の飲食店を継いでいる。またアートコレクティブ・アメフラシのメンバーとしても活動。コンセプトワーク、ライティング、カメラを担当している。

「稲藁をつくる」より、藁細工用に栽培している「こだけ糯」の稲を、若い世代が年長世代から受け取る印象的なシーン。

穀といった人手が必要な数日だけ人が集まって作業するだけで十分でした。時間と労力がかかる藁打ち作業も、人手が多いことや機械を使う（若者の発想）ことで短時間で終わらせることができました。

そして、草鞋づくりのワークショップでは、田畝さんを中心とした経験者の方々が、若者に草鞋の編み方を教え、お昼には、獲れたもち米で餅つきをして食べました。

人が集って収穫を喜び、先人の知恵を学ぶ。何か、昔、集落にあったような世代の垣根を越えて、人と人が自然に繋がる風景が広がっていました。技術は、人から人へと受け継がれていくものだと思いますが、個人から地域へ受け継がれる、そんな継承の仕方があってもいいのだと、私たちが可能性を見せてもらった瞬間でもありません。

伝統文化を守る、継承するということ

聞こえはいいですが、無くなることに理由があり、意味があります。もしかすれば、時代の変化と共に草鞋文化がなくなっていくことは自然なことかもしれません。それでも、黒獅子まつりを続ける限りは伝統を守ろうと、寿会と獅子連が協力し、昔ながらの方法で稲作りからやってみることもまた、自然なことなのかもしれません。

この活動が、五年、十年と続き、今の若者の子供たちの代まで受け継がれていった時、本当の継承になるのではないかと思います。

※本文の執筆中、田畝弘さんが逝去されました。ご冥福をお祈りいたします。

## アメフラシ



二〇一五年に結成し山形県長井市を拠点に活動。アート・デザインを通じた地域との関わり方を模索している。二〇一六年より廃工場の活用「KOSYAN」プロジェクトを開始。季節や土地のイベントに合わせて用途を変容させる形で、自分たちの拠点でもありながらスペースの在り方が変化していく、市民アトリエ「KOSYAN」を運営。スタジオ、ショップ、飲食スペースとしての活用やイベント、ワークショップなど開催し、地元住民と共にワークショップ形式でのづくりの場を創造している。





## 「草鞋を」鑑賞」する——展示構成の覚書

文教の杜ながい事業企画運営 後藤拓朗

写真1、5 —母屋とつながる内蔵展示室はセンサー式照明になっており、近づくことでスポットライトが点灯する。本展では一足の草鞋が目飛び込んでくるように配置されている（草鞋は彫刻作品用のアクリルケース展示台上に設置され、その造形に注目し鑑賞することができる）。

写真2 —本展の主な構成要素である藁製品の制作工程は、田畝さん自身の経験から、身体に染み付いた制作手順を後世に伝えるために制作されたもの。ここでは草鞋に焦点を当て、本展の重要なテーマである稲藁文化の継承を、過去から未来へとつながる生命の循環に見立て展示構成している。

写真3 —新蔵一階蔵座敷では、映像作品「草鞋をつくる」と、過去に文教の杜が作成した二冊の冊子を解説シートに再構成し展示。稲作の現状や継承方法の具体案など、主にアメフラシによる活動を紹介している。

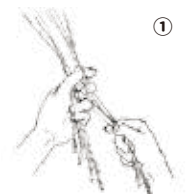
写真4、6 —新蔵展示室では草鞋以外の製品と映像作品「稲藁を作る」を展示。藁製品の途中経過な形態を提示している。その造形美や躍動感が伝わるよう、壁面に這わせ動きのある構成とした。



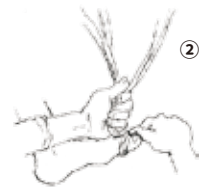
# 草鞋の編み方

## ① 縄作り

1. 準備

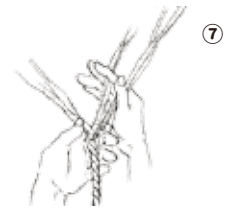


いなわら 3~4束にし、  
たば 右手と左手に持つ。



はし 2つの束の端を足の親指ではさむ。

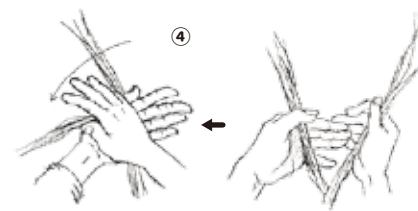
## ③ 継ぎ足し



稲藁が交差しているところに新しい束を差し込み、一緒にねじっていく。  
※はみ出ても、あとで切るのでOK。

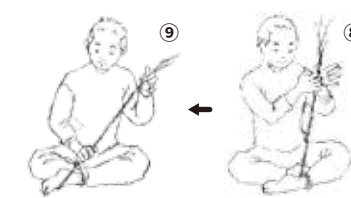
★上手に縄うポイント  
・稲藁をピンと張る  
持った束がピンと張っていないとうまく縄えない。足でしっかり抑えておく。  
・強く握るについで  
手が滑ってうまく縄えないときは、手のひらに霧吹きなどで水気を与えるとうりやすくなる(昔はツバをつけた)。

## ② 縄のはじめ



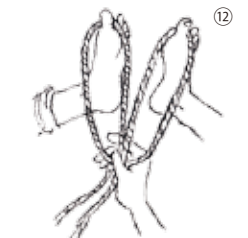
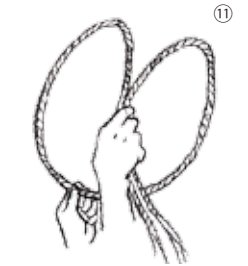
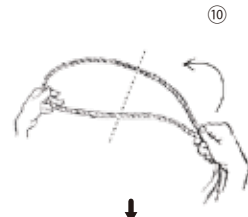
二つの束を両方の手のひらではさんで転がす。

## ④ 仕上げ

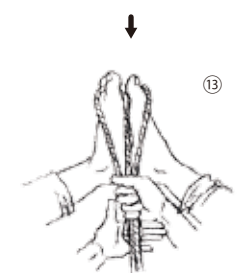


両手で強いヨリをかけて、藁屑がみかく。

## 1. サイズを決める

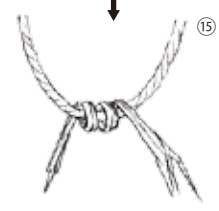


縄を両足にひっかける。  
※左の輪を少し長めにしておく。

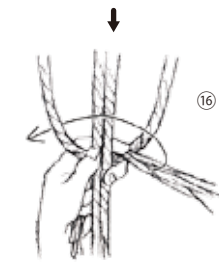


にぎ握りこぶしと指3本分

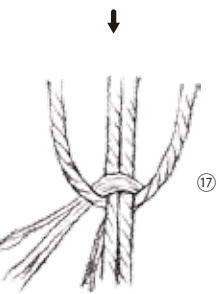
## 2. 綾をつくる ※綾・・・草鞋のつま先部分



いなわら 稲藁を数本束にし、  
縄の手前側に巻きつける。

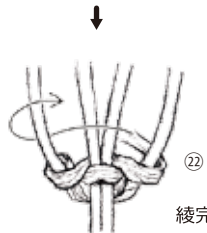
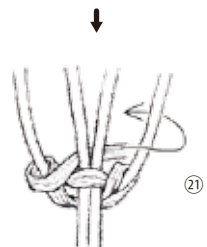
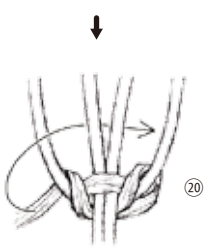
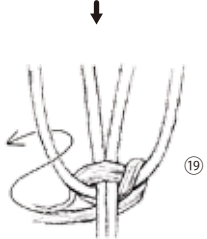
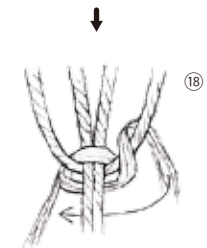


図の矢印の通りにからめていく。



綾完成!

## ② 草鞋編み



★丈夫に編むポイント

- ・左手は抑えたまま離さない。
- ・編み終わりと継ぎ足しの始まりは真ん中に合わせる。
- ・何度も強く手前に引いて、固く締める。
- ・稲藁の節が外側(草鞋のふち)に来ないようにする。

②③ 縄の手前、奥、手前、奥と交互に通す。

②④ ほどけないように手前に引いて締める

②⑤ 足りなくなったら足しながら編んでいく。

②⑥ 親指の付け根から中指の先くらのところで乳をつくる。

②⑦ 右回転にねじる。

②⑧ 親指に巻いて輪をつくる。

②⑨ 親指をはずしたら、左巻きにねじる。

②⑩ 反対側は逆の左巻きで、輪は右巻きにねじる。

②⑪ ②⑫ ②⑬ ②⑭ ②⑮ ②⑯ ②⑰ ②⑱ ②⑲ ②⑳ ②㉑ ②㉒ ②㉓ ②㉔ ②㉕ ②㉖ ②㉗ ②㉘ ②㉙ ②㉚ ②㉛ ②㉜ ②㉝ ②㉞ ②㉟ ③① ③② ③③ ③④ ③⑤ ③⑥ ③⑦ ③⑧ ③⑨ ③⑩ ③⑪ ③⑫ ③⑬ ③⑭ ③⑮ ③⑯ ③⑰ ③⑱ ③⑲ ③⑳ ③㉑ ③㉒ ③㉓ ③㉔ ③㉕ ③㉖ ③㉗ ③㉘ ③㉙ ③㉚ ③㉛ ③㉜ ③㉝ ③㉞ ③㉟ ④① ④② ④③ ④④ ④⑤ ④⑥ ④⑦ ④⑧ ④⑨ ④⑩ ④⑪ ④⑫ ④⑬ ④⑭ ④⑮ ④⑯ ④⑰ ④⑱ ④⑲ ④⑳ ④㉑ ④㉒ ④㉓ ④㉔ ④㉕ ④㉖ ④㉗ ④㉘ ④㉙ ④㉚ ④㉛ ④㉜ ④㉝ ④㉞ ④㉟ ⑤① ⑤② ⑤③ ⑤④ ⑤⑤ ⑤⑥ ⑤⑦ ⑤⑧ ⑤⑨ ⑤⑩ ⑤⑪ ⑤⑫ ⑤⑬ ⑤⑭ ⑤⑮ ⑤⑯ ⑤⑰ ⑤⑱ ⑤⑲ ⑤⑳ ⑤㉑ ⑤㉒ ⑤㉓ ⑤㉔ ⑤㉕ ⑤㉖ ⑤㉗ ⑤㉘ ⑤㉙ ⑤㉚ ⑤㉛ ⑤㉜ ⑤㉝ ⑤㉞ ⑤㉟ ⑥① ⑥② ⑥③ ⑥④ ⑥⑤ ⑥⑥ ⑥⑦ ⑥⑧ ⑥⑨ ⑥⑩ ⑥⑪ ⑥⑫ ⑥⑬ ⑥⑭ ⑥⑮ ⑥⑯ ⑥⑰ ⑥⑱ ⑥⑲ ⑥⑳ ⑥㉑ ⑥㉒ ⑥㉓ ⑥㉔ ⑥㉕ ⑥㉖ ⑥㉗ ⑥㉘ ⑥㉙ ⑥㉚ ⑥㉛ ⑥㉜ ⑥㉝ ⑥㉞ ⑥㉟ ⑦① ⑦② ⑦③ ⑦④ ⑦⑤ ⑦⑥ ⑦⑦ ⑦⑧ ⑦⑨ ⑦⑩ ⑦⑪ ⑦⑫ ⑦⑬ ⑦⑭ ⑦⑮ ⑦⑯ ⑦⑰ ⑦⑱ ⑦⑲ ⑦⑳ ⑦㉑ ⑦㉒ ⑦㉓ ⑦㉔ ⑦㉕ ⑦㉖ ⑦㉗ ⑦㉘ ⑦㉙ ⑦㉚ ⑦㉛ ⑦㉜ ⑦㉝ ⑦㉞ ⑦㉟ ⑧① ⑧② ⑧③ ⑧④ ⑧⑤ ⑧⑥ ⑧⑦ ⑧⑧ ⑧⑨ ⑧⑩ ⑧⑪ ⑧⑫ ⑧⑬ ⑧⑭ ⑧⑮ ⑧⑯ ⑧⑰ ⑧⑱ ⑧⑲ ⑧⑳ ⑧㉑ ⑧㉒ ⑧㉓ ⑧㉔ ⑧㉕ ⑧㉖ ⑧㉗ ⑧㉘ ⑧㉙ ⑧㉚ ⑧㉛ ⑧㉜ ⑧㉝ ⑧㉞ ⑧㉟ ⑨① ⑨② ⑨③ ⑨④ ⑨⑤ ⑨⑥ ⑨⑦ ⑨⑧ ⑨⑨ ⑨⑩ ⑨⑪ ⑨⑫ ⑨⑬ ⑨⑭ ⑨⑮ ⑨⑯ ⑨⑰ ⑨⑱ ⑨⑲ ⑨⑳ ⑨㉑ ⑨㉒ ⑨㉓ ⑨㉔ ⑨㉕ ⑨㉖ ⑨㉗ ⑨㉘ ⑨㉙ ⑨㉚ ⑨㉛ ⑨㉜ ⑨㉝ ⑨㉞ ⑨㉟ ⑩① ⑩② ⑩③ ⑩④ ⑩⑤ ⑩⑥ ⑩⑦ ⑩⑧ ⑩⑨ ⑩⑩ ⑩⑪ ⑩⑫ ⑩⑬ ⑩⑭ ⑩⑮ ⑩⑯ ⑩⑰ ⑩⑱ ⑩⑲ ⑩⑳ ⑩㉑ ⑩㉒ ⑩㉓ ⑩㉔ ⑩㉕ ⑩㉖ ⑩㉗ ⑩㉘ ⑩㉙ ⑩㉚ ⑩㉛ ⑩㉜ ⑩㉝ ⑩㉞ ⑩㉟ ⑪① ⑪② ⑪③ ⑪④ ⑪⑤ ⑪⑥ ⑪⑦ ⑪⑧ ⑪⑨ ⑪⑩ ⑪⑪ ⑪⑫ ⑪⑬ ⑪⑭ ⑪⑮ ⑪⑯ ⑪⑰ ⑪⑱ ⑪⑲ ⑪⑳ ⑪㉑ ⑪㉒ ⑪㉓ ⑪㉔ ⑪㉕ ⑪㉖ ⑪㉗ ⑪㉘ ⑪㉙ ⑪㉚ ⑪㉛ ⑪㉜ ⑪㉝ ⑪㉞ ⑪㉟ ⑫① ⑫② ⑫③ ⑫④ ⑫⑤ ⑫⑥ ⑫⑦ ⑫⑧ ⑫⑨ ⑫⑩ ⑫⑪ ⑫⑫ ⑫⑬ ⑫⑭ ⑫⑮ ⑫⑯ ⑫⑰ ⑫⑱ ⑫⑲ ⑫⑳ ⑫㉑ ⑫㉒ ⑫㉓ ⑫㉔ ⑫㉕ ⑫㉖ ⑫㉗ ⑫㉘ ⑫㉙ ⑫㉚ ⑫㉛ ⑫㉜ ⑫㉝ ⑫㉞ ⑫㉟ ⑬① ⑬② ⑬③ ⑬④ ⑬⑤ ⑬⑥ ⑬⑦ ⑬⑧ ⑬⑨ ⑬⑩ ⑬⑪ ⑬⑫ ⑬⑬ ⑬⑭ ⑬⑮ ⑬⑯ ⑬⑰ ⑬⑱ ⑬⑲ ⑬⑳ ⑬㉑ ⑬㉒ ⑬㉓ ⑬㉔ ⑬㉕ ⑬㉖ ⑬㉗ ⑬㉘ ⑬㉙ ⑬㉚ ⑬㉛ ⑬㉜ ⑬㉝ ⑬㉞ ⑬㉟ ⑭① ⑭② ⑭③ ⑭④ ⑭⑤ ⑭⑥ ⑭⑦ ⑭⑧ ⑭⑨ ⑭⑩ ⑭⑪ ⑭⑫ ⑭⑬ ⑭⑭ ⑭⑮ ⑭⑯ ⑭⑰ ⑭⑱ ⑭⑲ ⑭⑳ ⑭㉑ ⑭㉒ ⑭㉓ ⑭㉔ ⑭㉕ ⑭㉖ ⑭㉗ ⑭㉘ ⑭㉙ ⑭㉚ ⑭㉛ ⑭㉜ ⑭㉝ ⑭㉞ ⑭㉟ ⑮① ⑮② ⑮③ ⑮④ ⑮⑤ ⑮⑥ ⑮⑦ ⑮⑧ ⑮⑨ ⑮⑩ ⑮⑪ ⑮⑫ ⑮⑬ ⑮⑭ ⑮⑮ ⑮⑯ ⑮⑰ ⑮⑱ ⑮⑲ ⑮⑳ ⑮㉑ ⑮㉒ ⑮㉓ ⑮㉔ ⑮㉕ ⑮㉖ ⑮㉗ ⑮㉘ ⑮㉙ ⑮㉚ ⑮㉛ ⑮㉜ ⑮㉝ ⑮㉞ ⑮㉟ ⑯① ⑯② ⑯③ ⑯④ ⑯⑤ ⑯⑥ ⑯⑦ ⑯⑧ ⑯⑨ ⑯⑩ ⑯⑪ ⑯⑫ ⑯⑬ ⑯⑭ ⑯⑮ ⑯⑯ ⑯⑰ ⑯⑱ ⑯⑲ ⑯⑳ ⑯㉑ ⑯㉒ ⑯㉓ ⑯㉔ ⑯㉕ ⑯㉖ ⑯㉗ ⑯㉘ ⑯㉙ ⑯㉚ ⑯㉛ ⑯㉜ ⑯㉝ ⑯㉞ ⑯㉟ ⑰① ⑰② ⑰③ ⑰④ ⑰⑤ ⑰⑥ ⑰⑦ ⑰⑧ ⑰⑨ ⑰⑩ ⑰⑪ ⑰⑫ ⑰⑬ ⑰⑭ ⑰⑮ ⑰⑯ ⑰⑰ ⑰⑱ ⑰⑲ ⑰⑳ ⑰㉑ ⑰㉒ ⑰㉓ ⑰㉔ ⑰㉕ ⑰㉖ ⑰㉗ ⑰㉘ ⑰㉙ ⑰㉚ ⑰㉛ ⑰㉜ ⑰㉝ ⑰㉞ ⑰㉟ ⑱① ⑱② ⑱③ ⑱④ ⑱⑤ ⑱⑥ ⑱⑦ ⑱⑧ ⑱⑨ ⑱⑩ ⑱⑪ ⑱⑫ ⑱⑬ ⑱⑭ ⑱⑮ ⑱⑯ ⑱⑰ ⑱⑱ ⑱⑲ ⑱⑳ ⑱㉑ ⑱㉒ ⑱㉓ ⑱㉔ ⑱㉕ ⑱㉖ ⑱㉗ ⑱㉘ ⑱㉙ ⑱㉚ ⑱㉛ ⑱㉜ ⑱㉝ ⑱㉞ ⑱㉟ ⑲① ⑲② ⑲③ ⑲④ ⑲⑤ ⑲⑥ ⑲⑦ ⑲⑧ ⑲⑨ ⑲⑩ ⑲⑪ ⑲⑫ ⑲⑬ ⑲⑭ ⑲⑮ ⑲⑯ ⑲⑰ ⑲⑱ ⑲⑲ ⑲⑳ ⑲㉑ ⑲㉒ ⑲㉓ ⑲㉔ ⑲㉕ ⑲㉖ ⑲㉗ ⑲㉘ ⑲㉙ ⑲㉚ ⑲㉛ ⑲㉜ ⑲㉝ ⑲㉞ ⑲㉟ ⑳① ⑳② ⑳③ ⑳④ ⑳⑤ ⑳⑥ ⑳⑦ ⑳⑧ ⑳⑨ ⑳⑩ ⑳⑪ ⑳⑫ ⑳⑬ ⑳⑭ ⑳⑮ ⑳⑯ ⑳⑰ ⑳⑱ ⑳⑲ ⑳⑳ ⑳㉑ ⑳㉒ ⑳㉓ ⑳㉔ ⑳㉕ ⑳㉖ ⑳㉗ ⑳㉘ ⑳㉙ ⑳㉚ ⑳㉛ ⑳㉜ ⑳㉝ ⑳㉞ ⑳㉟ ㉑① ㉑② ㉑③ ㉑④ ㉑⑤ ㉑⑥ ㉑⑦ ㉑⑧ ㉑⑨ ㉑⑩ ㉑⑪ ㉑⑫ ㉑⑬ ㉑⑭ ㉑⑮ ㉑⑯ ㉑⑰ ㉑⑱ ㉑⑲ ㉑⑳ ㉑㉑ ㉑㉒ ㉑㉓ ㉑㉔ ㉑㉕ ㉑㉖ ㉑㉗ ㉑㉘ ㉑㉙ ㉑㉚ ㉑㉛ ㉑㉜ ㉑㉝ ㉑㉞ ㉑㉟ ㉒① ㉒② ㉒③ ㉒④ ㉒⑤ ㉒⑥ ㉒⑦ ㉒⑧ ㉒⑨ ㉒⑩ ㉒⑪ ㉒⑫ ㉒⑬ ㉒⑭ ㉒⑮ ㉒⑯ ㉒⑰ ㉒⑱ ㉒⑲ ㉒⑳ ㉒㉑ ㉒㉒ ㉒㉓ ㉒㉔ ㉒㉕ ㉒㉖ ㉒㉗ ㉒㉘ ㉒㉙ ㉒㉚ ㉒㉛ ㉒㉜ ㉒㉝ ㉒㉞ ㉒㉟ ㉓① ㉓② ㉓③ ㉓④ ㉓⑤ ㉓⑥ ㉓⑦ ㉓⑧ ㉓⑨ ㉓⑩ ㉓⑪ ㉓⑫ ㉓⑬ ㉓⑭ ㉓⑮ ㉓⑯ ㉓⑰ ㉓⑱ ㉓⑲ ㉓⑳ ㉓㉑ ㉓㉒ ㉓㉓ ㉓㉔ ㉓㉕ ㉓㉖ ㉓㉗ ㉓㉘ ㉓㉙ ㉓㉚ ㉓㉛ ㉓㉜ ㉓㉝ ㉓㉞ ㉓㉟ ㉔① ㉔② ㉔③ ㉔④ ㉔⑤ ㉔⑥ ㉔⑦ ㉔⑧ ㉔⑨ ㉔⑩ ㉔⑪ ㉔⑫ ㉔⑬ ㉔⑭ ㉔⑮ ㉔⑯ ㉔⑰ ㉔⑱ ㉔⑲ ㉔⑳ ㉔㉑ ㉔㉒ ㉔㉓ ㉔㉔ ㉔㉕ ㉔㉖ ㉔㉗ ㉔㉘ ㉔㉙ ㉔㉚ ㉔㉛ ㉔㉜ ㉔㉝ ㉔㉞ ㉔㉟ ㉕① ㉕② ㉕③ ㉕④ ㉕⑤ ㉕⑥ ㉕⑦ ㉕⑧ ㉕⑨ ㉕⑩ ㉕⑪ ㉕⑫ ㉕⑬ ㉕⑭ ㉕⑮ ㉕⑯ ㉕⑰ ㉕⑱ ㉕⑲ ㉕⑳ ㉕㉑ ㉕㉒ ㉕㉓ ㉕㉔ ㉕㉕ ㉕㉖ ㉕㉗ ㉕㉘ ㉕㉙ ㉕㉚ ㉕㉛ ㉕㉜ ㉕㉝ ㉕㉞ ㉕㉟ ㉖① ㉖② ㉖③ ㉖④ ㉖⑤ ㉖⑥ ㉖⑦ ㉖⑧ ㉖⑨ ㉖⑩ ㉖⑪ ㉖⑫ ㉖⑬ ㉖⑭ ㉖⑮ ㉖⑯ ㉖⑰ ㉖⑱ ㉖⑲ ㉖⑳ ㉖㉑ ㉖㉒ ㉖㉓ ㉖㉔ ㉖㉕ ㉖㉖ ㉖㉗ ㉖㉘ ㉖㉙ ㉖㉚ ㉖㉛ ㉖㉜ ㉖㉝ ㉖㉞ ㉖㉟ ㉗① ㉗② ㉗③ ㉗④ ㉗⑤ ㉗⑥ ㉗⑦ ㉗⑧ ㉗⑨ ㉗⑩ ㉗⑪ ㉗⑫ ㉗⑬ ㉗⑭ ㉗⑮ ㉗⑯ ㉗⑰ ㉗⑱ ㉗⑲ ㉗⑳ ㉗㉑ ㉗㉒ ㉗㉓ ㉗㉔ ㉗㉕ ㉗㉖ ㉗㉗ ㉗㉘ ㉗㉙ ㉗㉚ ㉗㉛ ㉗㉜ ㉗㉝ ㉗㉞ ㉗㉟ ㉘① ㉘② ㉘③ ㉘④ ㉘⑤ ㉘⑥ ㉘⑦ ㉘⑧ ㉘⑨ ㉘⑩ ㉘⑪ ㉘⑫ ㉘⑬ ㉘⑭ ㉘⑮ ㉘⑯ ㉘⑰ ㉘⑱ ㉘⑲ ㉘⑳ ㉘㉑ ㉘㉒ ㉘㉓ ㉘㉔ ㉘㉕ ㉘㉖ ㉘㉗ ㉘㉘ ㉘㉙ ㉘㉚ ㉘㉛ ㉘㉜ ㉘㉝ ㉘㉞ ㉘㉟ ㉙① ㉙② ㉙③ ㉙④ ㉙⑤ ㉙⑥ ㉙⑦ ㉙⑧ ㉙⑨ ㉙⑩ ㉙⑪ ㉙⑫ ㉙⑬ ㉙⑭ ㉙⑮ ㉙⑯ ㉙⑰ ㉙⑱ ㉙⑲ ㉙⑳ ㉙㉑ ㉙㉒ ㉙㉓ ㉙㉔ ㉙㉕ ㉙㉖ ㉙㉗ ㉙㉘ ㉙㉙ ㉙㉚ ㉙㉛ ㉙㉜ ㉙㉝ ㉙㉞ ㉙㉟ ㉚① ㉚② ㉚③ ㉚④ ㉚⑤ ㉚⑥ ㉚⑦ ㉚⑧ ㉚⑨ ㉚⑩ ㉚⑪ ㉚⑫ ㉚⑬ ㉚⑭ ㉚⑮ ㉚⑯ ㉚⑰ ㉚⑱ ㉚⑲ ㉚⑳ ㉚㉑ ㉚㉒ ㉚㉓ ㉚㉔ ㉚㉕ ㉚㉖ ㉚㉗ ㉚㉘ ㉚㉙ ㉚㉚ ㉚㉛ ㉚㉜ ㉚㉝ ㉚㉞ ㉚㉟ ㉛① ㉛② ㉛③ ㉛④ ㉛⑤ ㉛⑥ ㉛⑦ ㉛⑧ ㉛⑨ ㉛⑩ ㉛⑪ ㉛⑫ ㉛⑬ ㉛⑭ ㉛⑮ ㉛⑯ ㉛⑰ ㉛⑱ ㉛⑲ ㉛⑳ ㉛㉑ ㉛㉒ ㉛㉓ ㉛㉔ ㉛㉕ ㉛㉖ ㉛㉗ ㉛㉘ ㉛㉙ ㉛㉚ ㉛㉛ ㉛㉜ ㉛㉝ ㉛㉞ ㉛㉟ ㉜① ㉜② ㉜③ ㉜④ ㉜⑤ ㉜⑥ ㉜⑦ ㉜⑧ ㉜⑨ ㉜⑩ ㉜⑪ ㉜⑫ ㉜⑬ ㉜⑭ ㉜⑮ ㉜⑯ ㉜⑰ ㉜⑱ ㉜⑲ ㉜⑳ ㉜㉑ ㉜㉒ ㉜㉓ ㉜㉔ ㉜㉕ ㉜㉖ ㉜㉗ ㉜㉘ ㉜㉙ ㉜㉚ ㉜㉛ ㉜㉜ ㉜㉝ ㉜㉞ ㉜㉟ ㉝① ㉝② ㉝③ ㉝④ ㉝⑤ ㉝⑥ ㉝⑦ ㉝⑧ ㉝⑨ ㉝⑩ ㉝⑪ ㉝⑫ ㉝⑬ ㉝⑭ ㉝⑮ ㉝⑯ ㉝⑰ ㉝⑱ ㉝⑲ ㉝⑳ ㉝㉑ ㉝㉒ ㉝㉓ ㉝㉔ ㉝㉕ ㉝㉖ ㉝㉗ ㉝㉘ ㉝㉙ ㉝㉚ ㉝㉛ ㉝㉜ ㉝㉝ ㉝㉞ ㉝㉟ ㉞① ㉞② ㉞③ ㉞④ ㉞⑤ ㉞⑥ ㉞⑦ ㉞⑧ ㉞⑨ ㉞⑩ ㉞⑪ ㉞⑫ ㉞⑬ ㉞⑭ ㉞⑮ ㉞⑯ ㉞⑰ ㉞⑱ ㉞⑲ ㉞⑳ ㉞㉑ ㉞㉒ ㉞㉓ ㉞㉔ ㉞㉕ ㉞㉖ ㉞㉗ ㉞㉘ ㉞㉙ ㉞㉚ ㉞㉛ ㉞㉜ ㉞㉝ ㉞㉞ ㉞㉟ ㉟① ㉟② ㉟③ ㉟④ ㉟⑤ ㉟⑥ ㉟⑦ ㉟⑧ ㉟⑨ ㉟⑩ ㉟⑪ ㉟⑫ ㉟⑬ ㉟⑭ ㉟⑮ ㉟⑯ ㉟⑰ ㉟⑱ ㉟⑲ ㉟⑳ ㉟㉑ ㉟㉒ ㉟㉓ ㉟㉔ ㉟㉕ ㉟㉖ ㉟㉗ ㉟㉘ ㉟㉙ ㉟㉚ ㉟㉛ ㉟㉜ ㉟㉝ ㉟㉞ ㉟㉟ ㊱① ㊱② ㊱③ ㊱④ ㊱⑤ ㊱⑥ ㊱⑦ ㊱⑧ ㊱⑨ ㊱⑩ ㊱⑪ ㊱⑫ ㊱⑬ ㊱⑭ ㊱⑮ ㊱⑯ ㊱⑰ ㊱⑱ ㊱⑲ ㊱⑳ ㊱㉑ ㊱㉒ ㊱㉓ ㊱㉔ ㊱㉕ ㊱㉖ ㊱㉗ ㊱㉘ ㊱㉙ ㊱㉚ ㊱㉛ ㊱㉜ ㊱㉝ ㊱㉞ ㊱㉟ ㊲① ㊲② ㊲③ ㊲④ ㊲⑤ ㊲⑥ ㊲⑦ ㊲⑧ ㊲⑨ ㊲⑩ ㊲⑪ ㊲⑫ ㊲⑬ ㊲⑭ ㊲⑮ ㊲⑯ ㊲⑰ ㊲⑱ ㊲⑲ ㊲⑳ ㊲㉑ ㊲㉒ ㊲㉓ ㊲㉔ ㊲㉕ ㊲㉖ ㊲㉗ ㊲㉘ ㊲㉙ ㊲㉚ ㊲㉛ ㊲㉜ ㊲㉝ ㊲㉞ ㊲㉟ ㊳① ㊳② ㊳③ ㊳④ ㊳⑤ ㊳⑥ ㊳⑦ ㊳⑧ ㊳⑨ ㊳⑩ ㊳⑪ ㊳⑫ ㊳⑬ ㊳⑭ ㊳⑮ ㊳⑯ ㊳⑰ ㊳⑱ ㊳⑲ ㊳⑳ ㊳㉑ ㊳㉒ ㊳㉓ ㊳㉔ ㊳㉕ ㊳㉖ ㊳㉗ ㊳㉘ ㊳㉙ ㊳㉚ ㊳㉛ ㊳㉜ ㊳㉝ ㊳㉞ ㊳㉟ ㊴① ㊴② ㊴③ ㊴④ ㊴⑤ ㊴⑥ ㊴⑦ ㊴⑧ ㊴⑨ ㊴⑩ ㊴⑪ ㊴⑫ ㊴⑬ ㊴⑭ ㊴⑮ ㊴⑯ ㊴⑰ ㊴⑱ ㊴⑲ ㊴⑳ ㊴㉑ ㊴㉒ ㊴㉓ ㊴㉔ ㊴㉕ ㊴㉖ ㊴㉗ ㊴㉘ ㊴㉙ ㊴㉚ ㊴㉛ ㊴㉜ ㊴㉝ ㊴㉞ ㊴㉟ ㊵① ㊵② ㊵③ ㊵④ ㊵⑤ ㊵⑥ ㊵⑦ ㊵⑧ ㊵⑨ ㊵⑩ ㊵⑪ ㊵⑫ ㊵⑬ ㊵⑭ ㊵⑮ ㊵⑯ ㊵⑰ ㊵⑱ ㊵⑲ ㊵⑳ ㊵㉑ ㊵㉒ ㊵㉓ ㊵㉔ ㊵㉕ ㊵㉖ ㊵㉗ ㊵㉘ ㊵㉙ ㊵㉚ ㊵㉛ ㊵㉜ ㊵㉝ ㊵㉞ ㊵㉟ ㊶① ㊶② ㊶③ ㊶④ ㊶⑤ ㊶⑥ ㊶⑦ ㊶⑧ ㊶⑨ ㊶⑩ ㊶⑪ ㊶⑫ ㊶⑬ ㊶⑭ ㊶⑮ ㊶⑯ ㊶⑰ ㊶⑱ ㊶⑲ ㊶⑳ ㊶㉑ ㊶㉒ ㊶㉓ ㊶㉔ ㊶㉕ ㊶㉖ ㊶㉗ ㊶㉘ ㊶㉙ ㊶㉚ ㊶㉛ ㊶㉜ ㊶㉝ ㊶㉞ ㊶㉟ ㊷① ㊷② ㊷③ ㊷④ ㊷⑤ ㊷⑥ ㊷⑦ ㊷⑧ ㊷⑨ ㊷⑩ ㊷⑪ ㊷⑫ ㊷⑬ ㊷⑭ ㊷⑮ ㊷⑯ ㊷⑰ ㊷⑱ ㊷⑲ ㊷⑳ ㊷㉑ ㊷㉒ ㊷㉓ ㊷㉔ ㊷㉕ ㊷㉖ ㊷㉗ ㊷㉘ ㊷㉙ ㊷㉚ ㊷㉛ ㊷㉜ ㊷㉝ ㊷㉞ ㊷㉟ ㊸① ㊸② ㊸③ ㊸④ ㊸⑤ ㊸⑥ ㊸⑦ ㊸⑧ ㊸⑨ ㊸⑩ ㊸⑪ ㊸⑫ ㊸⑬ ㊸⑭ ㊸⑮ ㊸⑯ ㊸⑰ ㊸⑱ ㊸⑲ ㊸⑳ ㊸㉑ ㊸㉒ ㊸㉓ ㊸㉔ ㊸㉕ ㊸㉖ ㊸㉗ ㊸㉘ ㊸㉙ ㊸㉚ ㊸㉛ ㊸㉜ ㊸㉝ ㊸㉞ ㊸㉟ ㊹① ㊹② ㊹③ ㊹④ ㊹⑤ ㊹⑥ ㊹⑦ ㊹⑧ ㊹⑨ ㊹⑩ ㊹⑪ ㊹⑫ ㊹⑬ ㊹⑭ ㊹⑮ ㊹⑯ ㊹⑰ ㊹⑱ ㊹⑲ ㊹⑳ ㊹㉑ ㊹㉒ ㊹㉓ ㊹㉔ ㊹㉕ ㊹㉖ ㊹㉗ ㊹㉘ ㊹㉙ ㊹㉚ ㊹㉛ ㊹㉜ ㊹㉝ ㊹㉞ ㊹㉟ ㊺① ㊺② ㊺③ ㊺④ ㊺⑤ ㊺⑥ ㊺⑦ ㊺⑧ ㊺⑨ ㊺⑩ ㊺⑪ ㊺⑫ ㊺⑬ ㊺⑭ ㊺⑮ ㊺⑯ ㊺⑰ ㊺⑱ ㊺⑲ ㊺⑳ ㊺㉑ ㊺㉒ ㊺㉓ ㊺㉔ ㊺㉕ ㊺㉖ ㊺㉗ ㊺㉘ ㊺㉙ ㊺㉚ ㊺㉛ ㊺㉜ ㊺㉝ ㊺㉞ ㊺㉟ ㊻① ㊻② ㊻③ ㊻④ ㊻⑤ ㊻⑥ ㊻⑦ ㊻⑧ ㊻⑨ ㊻⑩ ㊻⑪ ㊻⑫ ㊻⑬ ㊻⑭ ㊻⑮ ㊻⑯ ㊻⑰ ㊻⑱ ㊻⑲ ㊻⑳ ㊻㉑ ㊻㉒ ㊻㉓ ㊻㉔ ㊻㉕ ㊻㉖ ㊻㉗ ㊻㉘ ㊻㉙ ㊻㉚ ㊻㉛ ㊻㉜ ㊻㉝ ㊻㉞ ㊻㉟ ㊼① ㊼② ㊼③ ㊼④ ㊼⑤ ㊼⑥ ㊼⑦ ㊼⑧ ㊼⑨ ㊼⑩ ㊼⑪ ㊼⑫ ㊼⑬ ㊼⑭ ㊼⑮ ㊼⑯ ㊼⑰ ㊼⑱ ㊼⑲ ㊼⑳ ㊼㉑ ㊼㉒ ㊼㉓ ㊼㉔ ㊼㉕ ㊼㉖ ㊼㉗ ㊼㉘ ㊼㉙ ㊼㉚ ㊼㉛ ㊼㉜ ㊼㉝ ㊼㉞ ㊼㉟ ㊽① ㊽② ㊽③ ㊽④ ㊽⑤ ㊽⑥ ㊽⑦ ㊽⑧ ㊽⑨ ㊽⑩ ㊽⑪ ㊽⑫ ㊽⑬ ㊽⑭ ㊽⑮ ㊽⑯ ㊽⑰ ㊽⑱ ㊽⑲ ㊽⑳ ㊽㉑ ㊽㉒ ㊽㉓ ㊽㉔ ㊽㉕ ㊽㉖ ㊽㉗ ㊽㉘ ㊽㉙ ㊽㉚ ㊽㉛ ㊽㉜ ㊽㉝ ㊽㉞ ㊽㉟ ㊾① ㊾② ㊾③ ㊾④ ㊾⑤ ㊾⑥ ㊾⑦ ㊾⑧ ㊾⑨ ㊾⑩ ㊾⑪ ㊾⑫ ㊾⑬ ㊾⑭ ㊾⑮ ㊾⑯ ㊾⑰ ㊾⑱ ㊾⑲ ㊾⑳ ㊾㉑ ㊾㉒ ㊾㉓ ㊾㉔ ㊾㉕ ㊾㉖ ㊾㉗ ㊾㉘ ㊾㉙ ㊾㉚ ㊾㉛ ㊾㉜ ㊾㉝ ㊾㉞ ㊾㉟ ㊿① ㊿② ㊿③ ㊿④ ㊿⑤ ㊿⑥ ㊿⑦ ㊿⑧ ㊿⑨ ㊿⑩ ㊿⑪ ㊿⑫ ㊿⑬ ㊿⑭ ㊿⑮ ㊿⑯ ㊿⑰ ㊿⑱ ㊿⑲ ㊿⑳ ㊿㉑ ㊿㉒ ㊿㉓ ㊿㉔ ㊿㉕ ㊿㉖ ㊿㉗ ㊿㉘ ㊿㉙ ㊿㉚ ㊿㉛ ㊿㉜ ㊿㉝ ㊿㉞ ㊿㉟

5. かかとをしくる

③② 左側(A)の山が少し長くなるように調整する。

③③ AにBを通して交差させ、締めながらぼみをつくる。  
※昔は「そこて鉋」を使った。

③④ 図のように輪を締めていく。

③⑤ ほどけないように手前に引いて締める

③⑥ 左側(A)の山が少し長くなるように調整する。

③⑦ AにBを通して交差させ、締めながらぼみをつくる。  
※昔は「そこて鉋」を使った。

③⑧ 根本のヨリをほどきそこに輪を通す。

完成!



## 令和二年度置賜文化フォーラム地域文化振興支援事業 稲藁文化を継承するプロジェクト

展覧会：稲藁と暮らす - 勸進代地区の稲藁文化 -  
2020年11月10日 - 12月27日

丸大扇屋内蔵・新蔵

作品・資料提供：田畝弘、LLP アメフラシ、西根コミュニティセンター、長井市

トークショー：ドキュメント映像「草鞋をつくる」「稲藁をつくる」制作談  
勸進代地区の稲藁文化とその継承

2020年11月23日

小桜館ホール

講師：田畝弘、村上滋郎

ワークショップ：農家の冬仕事・草鞋づくりを体験しよう

2021年1月17日

小桜館ホール

講師：村上滋郎、池田将友

制作補助：渡辺松夫、梅津弘

### 稲藁と暮らす - 勸進代地区の稲藁文化 -

編集：後藤拓朗

イラスト：松崎綾子、後藤拓朗

発行日：2021年2月

発行：(一財) 文教の杜ながい

〒993-0086 山形県長井市十日町一丁目11番7号

Tel 0238-88-4151 Fax 0238-88-4045

E-mail [bunyouyou@e.jan.ne.jp](mailto:bunyouyou@e.jan.ne.jp)

<https://bunyouyoumori.com>

Printed in Japan 2021

© 文教の杜ながい